

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 志田 雅宏	留学機関名 ヘブライ大学
留学先国名 イスラエル	留学期間 西暦 2011年8月～2013年7月
研究テーマ 中世ユダヤ教の聖典解釈についての宗教学的考察—ナフマニデス(1194-1270)の著作を中心に—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>ユダヤ教の聖典解釈の歴史において、中世キリスト教圏のスペインはもっとも重要な中心地のひとつとなった。それは、この地でユダヤ教指導者として活動したナフマニデス(1194-1270)によって確立された。ナフマニデスは、ヨーロッパおよび中東や北アフリカの各地で独立して形成されてきたユダヤ教の諸文化を統合しようと努めた。また彼はキリスト教の修道士との論争に臨み、キリスト教徒による改宗活動の脅威からスペインのユダヤ人を守ることに大きな貢献を果たした。その意味で、ナフマニデスの活動や著作には、宗教における文化形成や宗教間の関係のあり方について、中世ユダヤ教という歴史的な文脈から考察していくための豊かな示唆が含まれていると言える。</p> <p>中世ユダヤ教の聖典解釈というテーマは従来、ユダヤ教思想史やスペイン史の文脈で研究され、その担い手のほとんどがユダヤ人だった。私はそれらの先行研究を踏まえつつ、そこに宗教学的の理論や視座を照射する。その理由および意義について、次の3点が具体的に挙げられる。</p> <p><u>1. 異文化としてのユダヤ教理解</u></p> <p>中世ユダヤ教やナフマニデスが日本で知られていないのは、単にそれらが異文化だというだけでなく、それらについての研究の担い手の大半がユダヤ人だったため、異文化理解の意識に希薄だったからでもある。一方、宗教学では研究者が自分の信仰対象と研究対象との間に距離をとり、他宗教との比較も積極的におこなわれる。ゆえに、私は異文化として中世ユダヤ教にアプローチし、ユダヤ教のみならず諸宗教の研究者と議論をおこない、中世やユダヤ教といった現代日本と異なる世界の魅力や、異文化を理解することの意義を発信することを自らに課す。</p> <p><u>2. 人文系研究への批判的な議論の投げかけ</u></p> <p>ナフマニデスの研究をする上で重要な考察対象になるのは彼の聖典読解である。ナフマニデスは浩瀚な聖書の註解を書いたが、そこには各地のユダヤ教聖典学習の様式や、哲学や神秘主義などのユダヤ教思想も流れ込む。そこでの「聖典を読むこと」は人文系研究における「テキストを読み、思想を研究する」という営みと似ている。だが、聖典の読解には、読まれるものの異質さ(神聖なテキスト)、宗教的に見たときの正邪の判断など、宗教特有の要素が見られる。ゆえに聖典読解の研究は、人文系研究の基本的な構成要素である「テキスト」「解釈」「意味」「真理」が、宗教的なカテゴリーに入ってくるときに、単なる真偽の基準だけでなく、聖俗や正邪など多様な基準によってはかられることを指摘できる。そしてそれは、聖典解釈の場からテキスト研究のあり方を批判的に考え直す契機となるだろう。</p> <p><u>3. 自分自身の研究の分厚さのために、研究の本場に入ることの重要性</u></p> <p>宗教学では研究者が対象の宗教に対して距離をとるが、そのことがその宗教に対する不誠実さであってはならない。誠実であるために、本テーマの研究の中心地であるヘブライ大学に腰を据え、資料や先行研究と向き合うことが必要である。本テーマについては、ヘブライ語による研究論文が今なお数多く発表され、大学図書館や国立博物館には貴重な一次資料も豊富にそろっている。これらの充実した環境は日本では経験できないものである。異文化へのアプローチは視点の新奇さをうたって本場での先行研究と断絶することを意図しているのでは決してなく、むしろ他者なりにその文化を分厚く理解することを通じて、そうした研究と積極的に関係を構築していくものでなければならない。</p>	

# 成果報告書

記入日 2013年 10月 7日

氏名 志田 雅宏	留学先国名 イスラエル	所属機関 ヘブライ大学
研究テーマ：中世ユダヤ教の聖典解釈についての宗教学的考察 ——ナフマニデス（1194-1270）を中心に——		
留学期間： 2011年 8月 ～ 2013年 7月		
<p>私が籍を置いていたヘブライ大学のあるエルサレムと、留学中に訪れたスペインで、私は中世ユダヤ教の文化伝統をめぐる相違に強い印象を受けた。私の博士論文のテーマであるナフマニデス（13世紀）が生まれたスペイン北部の町ジローナには、彼の名前を冠するユダヤ教文化の小さな研究所がある。そこは、失われつつある町のユダヤ人地区（Call）の保全を目的とする施設である。ジローナやバルセロナのあるカタルーニャ地方では12・13世紀にかけてユダヤ人共同体が繁栄した。しかし、その後は相次ぐ迫害やユダヤ人追放が起こり、中世末期にはほとんどのユダヤ人がこの地を去った。そして、ジローナのユダヤ人地区では彼らの礼拝所を押し潰すかのように巨大なカテドラルがそびえ、新しい道がユダヤ人の住居を分断した。私の目に強烈だったのは、その物理的な「破壊」であった。研究所に展示されていたユダヤ人墓地の石碑は大きく破損していたし、かつてユダヤ人地区の中心を走っていた道は朽ちた階段の跡をわずかに確認できる程度だった。その有様は「いまも生きている」というより、「かつてあった」という過去を強く訴えかけてきた。</p> <p>エルサレムが世界的な文化遺産の宝庫であることは言うまでもない。掘れば何かが出てくるということで、地下鉄の敷設などできるはずもなく、市内には近年になってようやくトラムが完成した。しかし、そこでは中世ユダヤ教の伝統は決して失われつつある遺産ではない。思想や歴史関係の講義や講演会で、中世最大のユダヤ教哲学者マイモニデス（12世紀）の名前が出ないことはきわめて稀だった。宗教系の書店に行けば、聖書やタルムードといったユダヤ教聖典の学習テキストから、より実践的なユダヤ法のテキストにいたるまで、そのすべてが中世以降のラビたちによる指南書としての性格を帯びていることに気づく。</p> <p>ユダヤ教は元来、口伝によって文化を伝承する宗教である。大学はもちろん、宗教学校でも書物は使われるが、師の話す言葉を弟子が聞くというところにエッセンスがある。それは、忘却との絶えざる闘いである。弟子は厳密な意味で、師の言葉を完全に理解しなければならない。口伝の集成であるタルムードの教えを完璧に理解しなければならない。99パーセントの理解では、それを次世代の弟子に伝えたときに、彼がどんなに優れた理解をしても、残りの1パーセントは埋められず、忘却されてしまう。そして、その伝承の完全さは永久に失われてしまうのである。口承の伝統とはそのようなまさに命がけの闘いなのだ。</p>		

私がエルサレムで中世ユダヤ教のアクチュアルな生を感じたのは、ユダヤ教の持つこのような「理解への厳格なこだわり」を様々な場面で見ただからである。大学でも宗教学校でも、彼らは中世のラビたちの言葉を完璧に理解することに苦心する。その矜持は、たとえ媒体が口頭から書物に移り変わってもずっと維持されているように見えた。そして、それは宗教文化や中世史を学ぶことの今日的な意義に対するひとつの答えでもあり、私を大いに励ますものであった。

私は2011年8月より2年間、ヘブライ大学のロスバーク・インターナショナルスクールの大学院に客員研究員として在籍した。当初の目的は、博士論文のテーマである「ナフマニデスの聖書解釈」の準備だったが、後述するとおり、2年間の留学で私は当初予想もしなかった新たなテーマ「中世ユダヤ教における反キリスト教論争文学」を発見することができた。

具体的な目的の内容は、ヘブライ語語学コースの修了、ナフマニデス関連の文献収集、ヘブライ大学文学部開講の講義への参加、研究者との面会、2013年7月の国際学会への参加の5点である。

語学コースについては、ヘブライ大学で開講されている「ウルパン」(非ヘブライ語話者のためのヘブライ語語学コース)に2011年8月より参加し、夏季・2011/12年度1学期・同2学期の全3クールで最終レベルのテストをパスし、1年目で「プトール」(修了証)を取得した。

文献収集については、国内の大学図書館、国立図書館、書店、ヘブライ大学からアクセス可能なオンラインのデータベースと論文検索エンジンを利用した。また、2013年2月にスペインのジローナにあるナフマニデス研究所を訪問し、スペイン語の文献を集め、研究員の方ともお会いした。文献の内容は、「ナフマニデスの聖書解釈」と「中世ユダヤ教における反キリスト教論争文学」という両テーマに関する著作(校訂版・写本)、研究文献(論文・書籍)、講義録(音源・映像)である。

講義への参加については、1年目はウルパンを中心にしつつ、中世ユダヤ教の聖書解釈入門、聖書学入門、ユダヤ思想入門、エルサレムの宗教共同体についての講義、ミシュナ入門という5つの講義に聴講生として参加した。2年目はイブン・エズラの文献講読、中世におけるユダヤ人とキリスト教徒の宗教論争、ラビたちの思想についての講義、ラビ文献における「論争」の概念、中世ユダヤ史におけるキリスト教徒およびイスラーム教徒とユダヤ人、教典と解釈についての講義、近代ヨーロッパのユダヤ教聖書解釈という7つの講義に参加した。そのうち、2年目の宗教論争についての授業では担当教官のラム・ベン＝シャローム博士の計らいにより、聴講生でありながら、ヘブライ語での口頭発表の機会を与えていただいた。また、2年目には同大学のチューター制度を利用し、シナイ・トゥラン博士の個人指導のもとで、中世のヘブライ語写本についての手ほどきを受けた(写本の探し方、取得手続き、解読の初歩的なステップなど)。さらに、ユダヤ法に関する研究会として、バルイラン大学(イスラエル)で教鞭をとられている言語学者の佐々木嗣也博士の発起によって、ヘブライ語文献の読書会を立ち上げた(2013年8月まで2年間継続)。

(次ページへ続く)

研究者との面会については、留学開始 2 年前に初めてお会いしたモシェ・ハルベルタル教授（ユダヤ思想）と再会したほか、前述の佐々木嗣也博士（ヘブライ語学）、ラム・ベン＝シャローム博士（ユダヤ史）、東京大学に招聘されたことのあるヨナタン・メイル博士（ユダヤ思想）およびシュロミ・ムアレム博士（比較文学）、同志社大学に短期滞在されたアヴィドヴ・リップスケル教授（ユダヤ文学）、チューターをお願いしたシナイ・トゥラン博士（文献学）、中世の宗教論争の専門家であるオーラ・リモール教授（ユダヤ史）らとお会いした。

国際学会への参加については、2013 年 7 月下旬にヘブライ大学で開催された第 16 回世界ユダヤ学会議に発表者として参加した。発表題目は「ユダヤ教メシアニズムについてのナフマニデスの態度 Nahmanides on the Jewish Messianism」であり、2012 年に『宗教研究』（第 372 号）で発表した論文「ナフマニデスのメシアニズム——バルセロナ公開討論からの展開——」（日本語）に、留学中の研究で得られた知見を加味したものをヘブライ語で発表した。この学会にはイスラエルはもちろん、アメリカやヨーロッパのユダヤ研究者も多数参加しており、様々な研究者と交流を持つことができた。

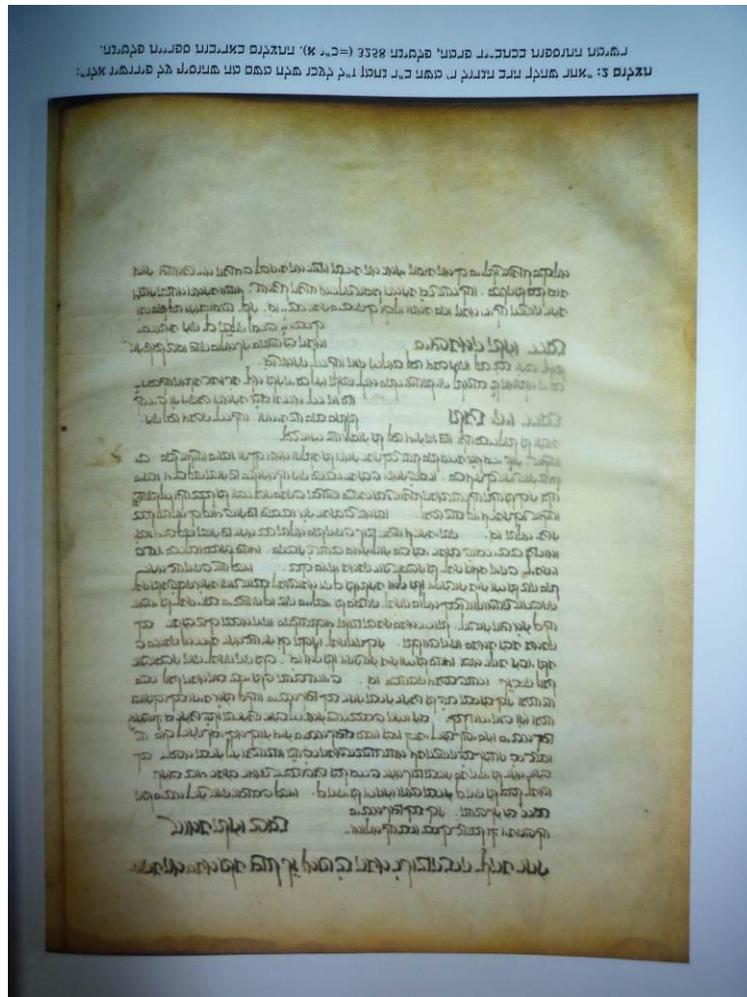
この留学で、私は従来の計画であった博士論文の準備、すなわち「ナフマニデスの聖書解釈」というテーマについての調査をはるかに上回る収穫を得ることができた。その最たるものは、主にベン＝シャローム博士からご教授いただいた「中世の宗教論争」というテーマの発見である。私が研究しているナフマニデスは 1263 年にキリスト教徒とバルセロナで公開討論を行っており、私も当初ナフマニデス研究の一環としてこのテーマに触れたにすぎなかった。しかし、実際には逆であり、バルセロナ公開討論とは中世の多岐に渡るユダヤ人とキリスト教徒の論争の一面にすぎないのである。ベン＝シャローム博士の授業はキリスト教の文化に直面したユダヤ人共同体の葛藤を描くものであり、重要な一次資料をゼミ形式で実際に読んでいくことを通じて、中世の宗教論争の生ける声に耳を傾けようとするものであった。このような知見の広がりには私自身、留学以前にはまったく予期していなかったことであった。

一方、博士論文のテーマについての研究でも大きな進歩があった。現在、ナフマニデスの著作に関する研究では、13 世紀以来各地に伝播した写本を収集、分析し、彼の聖書解釈の主著である『トーラー註解』の成立過程を検討する文献学的な研究が進められている。私もトゥラン博士の指導によって、その写本の一部をイスラエルの国立図書館で入手し、写本読解のトレーニングとして、それを読んでみた。現在、この分野の研究の第一人者はベングリオン大学（イスラエル）のヨセフ・オフエル教授であり、2013 年にその研究書がまとめられ、前述の第 16 回世界ユダヤ学会議でオフエル教授による研究報告も行われた。同研究は私の博士論文にとっても非常に重要な意義を持っており、その第一人者による報告と文献に触れることができたことは大きな収穫であった。

なお、留学中に得たこれらの成果は、2013 年 9 月の日本宗教学会第 72 回学術大会を皮切りに、いくつかの場所および雑誌で発表する予定である。国内だけではなく、国外での発表も視野に入れ、2014 年 7 月にパリで開催される第 10 回ヨーロッパユダヤ学会にも参加することを計画している。論文については博士論文の執筆を最優先事項とし、その後で日本ではほとんど知られていない「中世ユダヤ教における反キリスト教論争文学」についての紹介と個別の文献についての分析に着手していきたい。



エルサレム旧市街「ダビデの塔」より神殿の丘を背景に。



ナフマニデス『トーラー註解』写本（「パルマ写本」、ビブリオテカ・パラティーナ所蔵 3258）

ナフマニデスは 1267 年（73 歳）にアラゴン連合王国からパレスチナに移住した。主著『トーラー註解』は、その大半が移住以前に書かれたものだが、ナフマニデスは移住後、註解の巻末に付す形で補遺を書いている。

（参考：Yosef Ofer & Jonathan Jacobs, *Tosafot Ramban le-Perusho la-Torah : She-niktvu be-Eretz Yisrael (Nahmanides' Torah Commentary Addenda: Written in the Land of Israel)*, Jerusalem: Herzog, 2013, p. 681)